AMDA 多様性の共存 ジャーナル

2019 年 1 月 25 日　VOL.42　第 288 号　定価 550 円
発行／ AMDA　〒 700-0013　岡山市北区伊福町 3-31-1
TEL 086-252-7700　FAX 086-252-7717
E-mail:member@amda.or.jp
郵便振替：01250-2-40709　口座名：特定非営利活動法人アムダ

2019 年 冬 号　冬

救える命があればどこへでも

認定 特定非営利活動法人アムダ（AMDA）
http://amda.or.jp/
認定 特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
http://www.amda-minds.org/
特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
http://amda-imic.com/
AMDA 兵庫
http://amda-hyogo.com/

2019 年 新春のごあいさつ

理事長　菅波　茂

2019 年を迎えました。2018 年までの活動をふまえて、世の中の人たちに喜んでいただけるように更なる展開をしたく思っています。本年もご支援をよろしくお願い申し上げます。

昨年 7 月 7 日に西日本集中豪雨により、岡山県でも多大な被害が発生しました。予想外でした。これを「奇貨」として、水災害が発生した時にはいつでも、どこでも、有効に対応できる「AMDA 災害医療機動チーム構想」の具現化に尽力したく思っています。

海外ではバングラデッシュのコックスバザールにいるロヒンギャ難民のために医療チームを 1 年間派遣しました。国連高等弁務官がロヒンギャ難民のミャンマーへの帰還は困難と判断して入院施設のある医療機関の建設を開始します。AMDA はクリニックを運営していましたが、撤収します。そして、同根のミャンマー国内避難民である仏教徒やヒンズー教徒の医療支援を開始予定です。昨年から準備を進めてきています。双方ともに被害者です。

今年から Global Partnership of sustainable Peace(GPSP) のフィリピン版をモデル的に開始します。平和構築、健康増進、教育支援、生活支援の 4 分野のプロジェクト / プログラムに支援者から直接的にご寄付をいただくシステムです。支援先を団体だけでなくプロジェクト / プログラムにも選択肢を拡大します。2020 年から本格的に展開予定です。

2020 年 12 月を期限として世界災害医療プラットフォームを国連 - 政府 - 医師会 -NGO/NPO- 大学 - 公益団体 - 企業の 7 者連携を基盤として立ち上げる予定です。これは AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォームとは表裏一体として機能します。

その他にもいろいろな試みを進めています。基本的にはお互いに関連性のあるプロジェクト / プログラムです。AMDA の特徴は未来デザインにもとづいたプロジェクト / プログラムの開発と実施です。時代の変化に対応して、支援者と共に歩める、団体を心がけています。

皆様方のご理解とご支援をよろしくお願いします。

AMDA とスリランカ国民統一と和解委員会との MOU 調印

10 月 18 日、昨年度から連携を進めているスリランカ国民統一と和解委員会（The Office for National Unity and Reconciliation: ONUR）で、AMDA と ONUR の提携に関する会議が開催され、MOU 調印式が開かれました。ONUR は、クマーラトゥンガ前大統領が委員長を務め、スリランカ政府による平和構築活動を運営する委員会です。

スリランカは多様な民族や宗教、言語が共存している国です。紛争が終わった現在のスリランカに必要なことは、異なるアイデンティティによる「差異」を正しく理解し合うことです。そのためには、民族・宗教間の和解が現在のスリランカには欠かせません。その状況の中で、ONUR はシンハラ・タミル・ムスリム・キリスト教徒の子どもたちを集め、スリランカ独自の平和構築プログラムを提供しています。

AMDA もスリランカ内戦終了後 2011 年から AMDA スリランカ平和構築プログラムを継続して実施し、シンハラ・タミル・ムスリムそれに日本から同世代の学生達も参加し交流プログラムを行っています。

当初より ONUR は AMDA の「相互扶助」の理念や事業に強く賛同してくれていました。また同時に、ONUR のプログラムは AMDA スリランカ平和構築プログラムと理念的にも内容的にも共通する点が多いことから、プログラムをお互い協力して進めていこうという提案がありました。そうした過程を踏まえて、今回 AMDA と ONUR の MOU の調印に至りました。ONUR との調印式には、AMDA 菅波代表をはじめ、AMDA スリランカ・サマラゲ支部長、ONUR 事務局長らが出席しました。

（AMDA ボランティアセンター事務局長　竹谷　和子）

「AMDA こども食堂支援プラットフォーム」設立１年

AMDA こども食堂支援プラットフォーム事務局長　川崎医療福祉大学講師　**直島　克樹**

子どもの権利保障
支え合える地域づくりを目指して

AMDA こども食堂支援プラットフォームも設立して間もなく１年が経過しようとしています。正確な数は分かっていませんが、こども食堂は全国で 2,300 カ所以上に広がっています。様々な状況にある子どもたちを、地域で支えていきたいと願う人たちの想いが形となった地域の居場所は、子どもの権利保障の具体化でもあると思います。このことは支え合いの地域づくりを進めていく上でも必要不可欠であり、本プラットフォームの活動意義の一つでもあると考えています。

県内のこども食堂では、様々な状況にある子どもや家庭とのつながりが生まれ始めているところもあります。子どもや家庭だけでなく、学校などの教育施設、福祉専門機関等とのつながりも生まれているところも出てきています。ある子どもたちの居場所では、虐待等も疑われる事例が相談として入ってきたことも報告されています。対応した関係者の取り組みや関係機関による連携によって、無事子どもは保護されましたが、その過程の中で、子どもに提供された居場所でのご飯は、AMDA から提供されたお米や地域からのおすそ分けを材料としていました。

当事者のその子にとっては、久しぶりに誰かと一緒に食べた夕食でした。誰かと一緒にご飯を食べる、そんな“当たり前”が、その子自身からの SOS に最終的につながったと考えるのは、考え過ぎではないように思っています。

この１年間で、岡山県内のこども食堂などに、約 1t のお米を提供することが見込まれています。地域の中で、こども食堂などの誰もが集う場があることは、支え合いの地域をつくっていく上で欠かすことが出来ないと考えています。

今後は、本プラットフォームに頂いた寄附金を、希望する各こども食堂などの継続的な運営に役立てるために用いていくことも計画しています。子どもの“当たり前”を保障し、支え合える地域づくりを目指して、本プラットフォームも取り組みを一歩ずつ進めていきたいと考えています。

頑張っています　こども食堂

一般社団法人子どもの家運営委員会理事　**岸本 都志子**

赤磐市は岡山市の北東に隣接する半分ベッドタウン、半分は旧来の農村集落の人口 44,500 人の町です。岡山県には約 6800 戸の県営住宅がありますが、そのうち約 1200 戸（17.6%）が赤磐市（県民人口比 2.3%　岡山県 193.2 万人）に存在します。子どもの貧困率は全国平均より高いと思われます。

子どもの家は小学校と県営住宅を結ぶ線上にあり、通学時に子どもが自分の意志で歩いて立ち寄れるところで民家を使って運営しています。開所から３年半経ちました。開所日数 709 日、小学生～ 18 歳までの利用者 3,587 名、ボランティアスタッフ 3,666 名（平成 30 年 10 月末現在）です。

学習支援・食事の提供、必要に応じて入浴・洗濯を行っています。食事の準備の手伝いや手芸、テーブルゲームなども子どもたちの楽しみのひとつです。

「子どもの家」での夕食の様子

子どもからは食費は取っておらず、会費と寄付金・支援物資によって賄われており、スタッフは無償ボランティアでなおかつ食費を支払っています。公的な資金や助成金、継続的な支援を得て、学習教材の購入や専門家の導入など不足を補えるようになることが積年の課題です。

【メモ】

家庭の貧困など諸問題を抱える子どもの健やかな成長を願い、岡山県内で地域のボランティアの方々が相次いで「こども食堂」を開設。推定で約 30 カ所あるとされ、AMDA は 2017 年 12 月、産官学民で組織する「こども食堂支援プラットフォーム」を発足させました。こども食堂への食糧支援をはじめ、職場見学、ボランティアの場の提供を通じ、子どもの“自己肯定感”の醸成などに努めています。

西日本豪雨支援で「総社賞」受賞

11月3日の「文化の日」に総社市が市政功労者らを表彰する「総社賞」にAMDAが選ばれました。

受賞理由として、「AMDAは7月7日から8月31日までの間、西日本豪雨で被災地となった総社市に総勢145人を派遣し、診療活動や健康チェックなど災害支援に従事して頂きました。これらの活動は、AMDAの理念である「救える命があればどこへでも」「困った時はお互いさま」に基づくものであり、総社市の復興に大きな希望を与え頂きました」と高い評価を受けました。団体として受賞するのはAMDAが初めてです。

授与式は総社市中央1丁目の市総合福祉センターで行われ、片岡聡一市長は「AMDAとは連携協力協定を締結していますが、危機に瀕した総社市のために合同対策本部の一員として全力を尽くして頂いた。心から感謝しています」とあいさつされました。

表彰状を受けた菅波茂理事長は「総社市は豪雨の際、消防士があなたと私が助け合う“自他同一性”を体現されました。総社市が持つ慈悲の心と相互扶助、住民との信頼関係は行政の底力と言えます。“総社モデル”として国内外に発信してほしい」と述べました。

「総社賞」授賞式の様子

総社賞は、地域医療の安心確保に尽力されたとして、吉備医師会の元会長の三宅周医師（総社市総社）にも贈られました。

これまでの市政功労者表彰の名称は2017年度に「総社賞」と変更されています。（広報担当参与　今井　康人）

インド・ブッダガヤ：AMDAピースクリニック10周年記念式典

インド連邦最貧州と言われるビハール州ブッダガヤでAMDAは、2009年より継続的に活動しています。このブッダガヤには、世界遺産であり、仏陀が悟りを開いたとされるマハボディ寺院があり、2009年、その周辺にAMDAピースクリニックを開院しました。

開院当初はアユルベーダ治療中心の活動でしたが、2014年より現地のニーズに合わせて、妊産婦支援活動へ移行しました。月2回の産婦人科医による妊婦健診には2017年11月から2018年10月までの平均で、1回につき18人が受診するようになりました。妊産婦を対象に週1回行う健康教育と栄養プログラム（地元の野菜を使った妊産婦と乳幼児への食事提供）への出席率も高く1回につき平均16人の妊産婦が参加しました。2018年11月現在、36人の妊産婦が登録しAMDAのサービスを受けています。

2018年11月28日には、開院10周年記念式典が行われました。式典でAMDA菅波代表は、「今までは、日本からインドへの支援が中心の『スポンサーシップ』の形が主だった。今は、ブッダガヤを訪れる人達も日本人は少なくなり、東南アジアの人たちが中心となっていて、インド自体も経済発展が目覚ましい。これから先10年は、日本とインドが一緒になって支援の必要な人たちに手を差し伸べる『パートナーシップ』の形が中心になる。これからも時代に沿った支援活動を継続していきたい。」と述べました。

AMDAピースクリニックの取り組みに対して、今年初めて、当クリニックのサービスを受けた方から物のご寄付をいただきました。決して楽な生活を送られているわけではありませんが、「AMDAピースクリニックには本当にお世話になった。栄養プログラムで使用する使い捨てのお皿を妊産婦の人に使ってほしい。」という思いからのお申し出でした。　（インド担当　岩尾　智子）

10周年記念式典の様子

連載インタビュー「支える喜び」シリーズ 第19回

AMDAバングラデシュ支部事務局長　サーダー・A・ラザック 様

AMDAを支えてくださっている支援者の皆様に、インタビュー形式で様々なエピソードをお伺いしている「支える喜び」シリーズ。19回目となる今回は、AMDAバングラデシュ支部の事務局長として、イスラム系少数民族・ロヒンギャ難民の支援にご尽力されたラザック様にお話を伺いました。（聞き手・プロジェクトオフィサー　橋本千明）

AMDA　ロヒンギャ難民は2017年8月以降、ミャンマーから隣国のバングラデシュに大量流入しました。難民キャンプで過酷な生活を送る方々を支えて頂き、ありがとうございます。

ラザック　難民が国境を越えて移動している状況は、人道的に見て本当に危機的な状況です。難民キャンプのあるコックスバザール県にたどり着くために、ナフ川（平均水深39m）を渡ってきたのです

AMDA　難民の生活は如何でしょうか。

ラザック　家族との別離、故郷を追いやられた体験の苦しみ、トラウマを抱え、平常心を失っていることが明らかに見て取れます。これらの出来事は子どもたちの幸福な暮らしを脅かし、心身の成長に悪影響を及ぼしています。子どもたちを保護する施策が急がれます。このためには関連諸機関の援助や支援活動の規模拡大、支援委託組織の存在が必要なのです。

AMDA　キャンプ外で暮らす難民も増え続けていると聞いています。

ラザック　2018年4月中旬の時点で、9カ所の難民キャンプと居住地域で生活する難民は78万1,000人でした。加えてキャンプ外部の周辺地域で暮らしている難民は11万7,000人います。

AMDA　食糧事情や衛生環境は大丈夫でしょうか。

ラザック　バングラデシュ内で最大規模の難民キャンプの一つであるクトゥパロンでは50万人以上が居住しています。主な懸案事項と言えば、やはり水と公衆衛生です。食糧の供給はおおよそ十分ですが、難民の大多数は生計を支えるための仕事がなく、雇用の機会提供が最大の課題と私たちは考えています。

AMDA　AMDAバングラデシュ支部の支援内容を教えてください。

ラザック　今回のプロジェクトは、日本バングラデシュ友好病院が主体となって行われた合同診療所です。医療チームは医師2人、薬剤担当1人、助産師1人、調整員2人、医療アシスタント3人で構成。通常の診察から医薬品の投与、妊産婦のカウンセリングなどを行っています。これまでに診察した患者数は3万8,438人です。AMDA本部の皆さんには、難民に対する直接的なご支援とご尽力を頂き、大変感謝しています。

AMDA　ボランティアも活躍されていると聞きました。

ラザック　バングラデシュ政府の取り組みに対し、国内外の人道支援組織が迅速に支援を申し出ました。その数は45団体。当局の許可を待っている団体も10を数えます。さらに最前線で頑張っているのが地元コミュニティーの方々です。到着する難民に食べ物や基本物資を提供しています。

AMDA　早く難民問題が解決すると良いですね。

ラザック　今回の人道危機について、国連は「世界において最も差し迫った難民危機である」としています。バングラデシュはロヒンギャの人々に対し同情の念を寄せています。国境を開放するなど国際社会の支援を得てオープンに対応してきました。難民には様々な制限も課せられていますが、彼らは決して逆境には負けないと確信しています。

ハキム・アリフ医師（ダッカ大学コミュニケーション障害学部教授）

今年AMDAとバングラデシュ・ダウン症協会とダッカ大学コミュニケーション障害学部は、コミュニケーションに障がいを抱える子ども達を支援する為の覚書を交わしました。彼らの人権を守り、研究や文化交流を推進していきます。双方による今後の協力を期待しています。

（インタビュー内の敬称は省略させていただきました）

ロヒンギャ難民医療支援終了

AMDAは2017年10月より1年間の予定でAMDAバングラデシュ支部と日本バングラデシュ友好病院を中心に緊急医療支援を行ってきましたが、このたび1年間の支援を予定通り終了することとなりました。

ロヒンギャ難民は、ミャンマーに暮らすイスラム系少数民族。2017年8月25日の武力衝突以降、難民が隣国バングラデシュに大量流入しました。AMDAの活動内容は、ロヒンギャ難民キャンプ最大のクトゥパロン難民キャンプに診療所を開設しての医療支援。AMDA多国籍医師団としてバングラデシュ以外からも医療者の派遣を行い、2018年10月までにのべ35,000人以上を診療しました。11月にも、日本とネパールより医師を各1人、更にNPO法人TMATとも合同事業とし医師2名を派遣しました。

同時に、現状把握と今後の活動の可能性の検討のため、AMDA本部職員1人を現地に派遣しました。活動主体のAMDAバングラデシュ支部とともに現状把握を行った結果、人道危機発生から1年が経過し難民の大量流入は落ち着いたことを確認。難民登録もされ、今後は難民の未来を見据えた長期的な支援に移行する時期となっていることが判明しました。AMDAの医療支援に関して

ロヒンギャ難民キャンプにて診察を行うAMDA医師

は緊急期として一時的な診療・処方は効果をあげていましたが、今後は治療に繋がる検査や有床診療所の設置などが求められており、現地での活動を引継ぐこととしました。

2017年8月25日以降新たにバングラデシュに流入したロヒンギャ難民は73万5千人、それ以前からの人数を合計すると、推定難民数は90万2千人（2018年11月30日現在UNHCR発表）。

（バングラデシュ担当　橋本　千明）

ミャンマー国内避難民医療支援プロジェクト

AMDAは、1992年と同様に、2017年10月からバングラデシュのコックスバザールに難民としているロヒンギャの人たちを支援してきています。一方、ミャンマーのラカイン州には仏教徒ヒンズー教徒そしてイスラム教徒などの国内避難民がいることも事実です。

2018年10月。ラカイン州の州都であるシットウエイで、国内避難民である仏教徒に対する支援活動を行うCRR(ラカイン復興委員会)と医療支援のMOUを締結した。内容は1）仏教徒の国内避難民のキャンプにCRRが所有しているヘルスポストへの助産師の派遣と2）ヘルスポスト内の医療設備の整備に加えて3）キャンプ内で出産する母と子の支援の3点です。

同月26日に仏教徒が国内避難民として居住するキャンプをCRRと視察した。約1千人が4ケ所のキャンプに分かれており、そのうちの一つ、Maung Taw Townshipにあるキャンプ（約百世帯、三百人）を訪れ、36歳の助産師を紹介されました。内紛に巻き込まれ国内避難民となりCRRの設営したキャンプ内で夫婦一緒に生活。現在は、助産師の知識と経験を活かして、ボランティアでキャンプ内の人たちの出産のお手伝いや疾病の相談を受けています。根底には栄養の問題があると話

助産師と菅波理事長

してくれました。CRRのもとで4ケ所のキャンプに居住する約千人の人たちの健康管理と治療の必要を認めれば近くの病院(車で2時間)に紹介する業務を提案しました。喜んで受けてくれました。勿論、有給です。やる気満々が頼もしい限りです。

今後ともに、皆様方のご理解とご支援がいただければ望外の喜びです。

（理事長　菅波　茂）

天台宗一隅を照らす運動総本部様からご寄付

天台宗一隅を照らす運動総本部様（滋賀県大津市坂本）から10月31日、ご寄付を頂きました。

同総本部の森定慈仁総本部長がAMDA本部（岡山市北区伊福町）を訪ねて頂き、「全国の檀信徒を中心に集まった募金です。西日本豪雨の被災者や復興のために役立ててください」と述べて難波妙理事に目録を手渡しました。難波理事からは感謝状を贈らせて頂きました。

天台宗のAMDAへの寄付は2008年から始まり、今回で30回目です。

一隅を照らす運動は、天台宗を開かれた伝教大師最澄（767～822年）の精神を現代に生かすために取り組みを始め、来年の2019年に50周年を迎えます。

世界の一人ひとりが一隅を照らし自身が輝くことによって、家庭や職場、そして日本、地球を明るくことにつながるという運動です。

森定総本部長の話

天台宗は一隅を照らす運動として緊急支援、国内救援協力、海外協力支援、地球環境保全の4本柱の具体的な運動を展開していますが、AMDAの活動はまさに運動の趣旨にぴったりと合致します。今後の益々の活躍を期待しています。（広報担当参与　今井　康人）

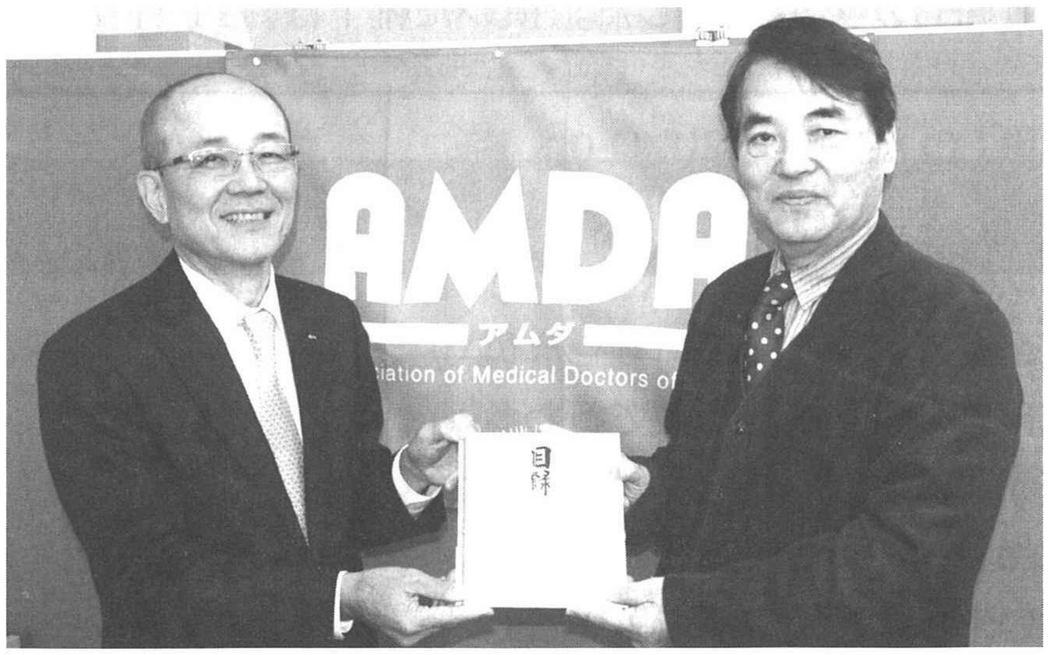
トマト銀行様からご寄付を頂きました

トマト銀行様（岡山市北区番町）が社会貢献の一環として、2018年11月1日から取り組んで頂いていた「AMDA国際医療貢献定期預金」が目標額に達したため、12月26日、AMDAにご寄付を頂きました。

トマト銀行の中山雅司常務取締役様ら4人がAMDA本部（岡山市北区伊福町）を訪ねて頂き、中山常務様が「世界各地の被災地などにいち早く出向かれるAMDA様の活動に、地元の銀行として敬意を寄せています。今後も頑張ってください」と述べ、ご寄付の目録を理事長の菅波茂に手渡しました。

菅波は「皆様の支援に感謝しています。大切に使わせて頂きます」とお礼の言葉を述べ、ＡＭＤＡボランティアセンター名誉センター - 長の小池彰和が感謝状を中山常務様に贈りました。続いて、理事の難波妙がAMDAの取り組みを述べました。

AMDA国際医療貢献定期預金は、店頭表示金利に



0.05％を上乗せした期間限定の特別商品。トマト銀行様がAMDAの活動に賛同して取り組んで頂いたもので、預入総額の0.1％がAMDAに寄付されるものです。預入をされたご本人様の負担はないという商品で、2015年から始まり、今回が4回目です。

（広報担当参与　今井康人）

モンゴルの RMC と連携協力協定を締結

AMDA は 10 月 9 日、モンゴルの首都ウランバートルにある不妊症専門病院・RMC（モンゴル再生医療センター）と連携協力協定を締結しました。

協定では、災害などの際、医療福祉面で被災者らをサポートするほか、RMC は AMDA の多国籍医師団に協力するなど相互扶助を通して世界平和に貢献するとしています。

AMDA 本部で行われた締結式では、菅波茂理事長と RMC のノムンダリ院長が協定書に署名。ノムンダリ院長は「締結ができ、本当に心強い。AMDA の理念である相互扶助の精神を生かして活動していきたい」とあいさつ。菅波理事長は「締結に当たり、不妊症の臨床技術に優れた倉敷成人病センター及び岡山二人クリニック、そして医療機器メーカー株式会社アステックには大変お世話になった。感謝したい」と述べました。

ノムンダリ院長は、高校時代の 1 年半、広島市に留学。モンゴル国立医科大学に在学中には、AMDA がモンゴル

で取り組んだ眼科健診で通訳を務めてもらうなど菅波理事長とは 10 年を超す交流があります。西日本豪雨の際は 1,000 ドルのご寄付を頂きました。

RMC は 2017 年、モンゴルでは 3 番目の不妊症専門病院として設立。患者数は年間で約 1,000 人。モンゴルでは約 10%が不妊症とされています。

（GPSP 支援局長　難波　妙）

モンゴル医師団より寒い冬に備えて温かいソックスのご寄付

10 月 25 日、岡山労災病院にアスベスト（石綿）対策の研修のために来岡したモンゴル人医師 20 名を代表して、元保健副大臣アタルマ先生が西日本豪雨災害被災者のためにキャメルやウールの靴下 100 足をご寄付くださいました。同病院名誉院長の清水信義先生の長年にわたるモンゴルとの交流のご縁により、AMDA の活動をご紹介いただき、今回のご寄付が実現しました。頂いた靴下は、11 月 4 日、

総社市長にお渡しし、被災された方々に届けられました。

尚、モンゴルからは、この他にも関西モンゴル人会や、株式会社モンゴラインからも支援物資をいただいています。寒い冬を前に、支援物資を受け取った方々は、極寒を乗り切るモンゴルからの温かいご寄付にとても喜んでくださいました。

（GPSP 支援局長　難波　妙）

赤磐市防災訓練

AMDA は 11 月 25 日、赤磐市千躰の吉井川河川敷で行われた赤磐市主催の総合防災訓練に参加し、ブースでパネル展示を行いました。西日本豪雨の支援、北海道胆振東部地震での医療支援活動をはじめ、海外での地震や洪水被害での取り組みを紹介し、国際医療支援ボラボランティア活動に理解を深めて頂きました。

住民の方々は次々とブースに立ち寄られ「遠くの災害でもすぐに出かけて行くんじゃなぁ」と声を掛けてもらいました。

（赤磐市出向職員　三宅　孝士）

コープフェスタ 2018

AMDA は 9 月 22 日、コンベックス岡山で開かれた「コープフェスタ 2018」（おかやまコープ主催）に出展しました。

ブースには、西日本豪雨や北海道胆振東部地震、インド・ケララ州洪水などの緊急支援をはじめ、スリランカ平和構築活動、ロヒンギャ難民の支援を紹介するパネル写真を掲示、東北の海産物などを AMDA 玉野クラブが委託販売しました。（AMDA ボランティアセンター事務局長　竹谷　和子）